

# Glocal Tenri

Newsletter

月刊 **グローバル天理** Monthly Bulletin Vol.4 No.1 January 2003

天理大学 おやさと研究所 Oyasato Institute for the Study of Religion, Tenri University



1

## 巻頭言

## 「レンタルの思想」とかしもの・かりものの教理

おやさと研究所長 井上昭夫 Akio Inoue

限りなく富を追究して膨脹する人間圏と、それともなう地球環境破壊の問題を解決するための考え方として、最近注目すべきものに「レンタルの思想」というのがある。レンタルとはレンタカーのレンタルであるから、「レンタルの思想」を一言で言えば「借りものの思想」ということになる。比較惑星学者・松井孝典東大大学院教授などが提唱する「地球学」の骨子をなす新しい考え方であるが、この先端科学が生み出した思想には、天理教独自の伝統的自然観と身体観に通底しているところがある。

人類は悠久の歴史の中で豊かになるということを追究して生きてきた。そして、豊かになることは人間にとって具体的に物を「所有」することを意味した。しかし、いまこの豊かさの意味が人間圏の危機の中で問われている。つまり、人間の物に対する「所有」欲が現在のスピードで増幅すれば、人口増加や生産消費の拡大率の異常さの中で、人類は後100年も存続し得ないであろうと言われる。つまり、物の「所有」ということについて考え直すことが求められているのである。この物の「所有」に対するアンチテーゼとして、「借りもの」という思想が科学の領域から突如として飛び出してきた。

松井教授は、我々が生きていくにあたって必要としているのは物(製品)ではなくて、その物(製品)の「機能」だけであり、自分の「所有」と思っているからだも、実は物として地球から借りているに過ぎないと述べる。借りた物から各種の臓器がつけられ、その臓器の「機能」を使って私たちは生きているのだという。その「機能」を使うということが生きるためには重要なことであって、人間のからだそのものが物として意味があるのではない、死ねば地球に返るだけだとも述べる。

物それ自体が重要なのではなく、「機能」が重要だというこの地球学者の主張は、自然の「機能」や自然の一部である人間の身体の動きは、神の守護の配下にあり、人間のからだは神からのかしものかりものであるという教理に通じている。「レンタルの思想」が科学の領域の中で自ずと限界を見せるのは、その借りた物の貸された目的の欠落であり、その「機能」の目的に反する使い方を戒める具体的倫理や道徳の不在である。しかし、このあらたな思想のインパクトは宗教的にも強烈なものがある。

かえりみれば近代の自然科学は、二元論と要素還元主義から成り立っていた。前者は、人間が自然を認識する主体であり、自然は人間に認識される客体であるという考え方である。後者は、宇

宙全体を理解するためには、それを構成している部分を組み合わせたものが全体であるという考え方である。しかし、量子力学の分野において、たとえば観測する主体の行為が、認識しようとする素粒子という客体に影響を及ぼしていることが分かり、主体と客体が分離しているという考え方の前提が崩れてしまった。また、認識された部分の足し算で物質の全体像が理解されるという考え方も破綻した。自然全体を理解するためには、その部分を単純に足し算すればよいとは認められない自然の複雑さがつぎつぎとわかってきたからである。そこから複雑系と名の付くさまざまな学問が誕生した。

そこで21世紀の科学においては、二元論と要素還元主義の限界をいかにして超えるかということが問題となってきた。その方法として松井教授は、注目すべき二つの議論を展開している。一つは、自然・宇宙の構成要素は、互いに関係をもってつながった一つの系であるとして全体を説明しようとするシステム論であり、もう一つは、自然は宇宙の歴史を記録した古文書であるという見方である。つまり、氏はわれわれは知的生命体として知の体系を創造しているのではなく、自然の中に書かれている「古文書」を読んでいるに過ぎないと主張する。この立場に立つと、知の体系が拡大し、自然がより総合的に解釈できるのは、自然を解読する道具が時代と共に効率よくなっているということに過ぎないということになる。この考え方は、自然を神の身体、道具を教理解釈という言葉に置きかえれば、限りなく天理教の教えに近い考え方であろう。自然を「古文書」として読むということは、神の身体である自然を成り立たせている機能と働きを解読するというところに他ならないからである。また前者のシステム論は、個と全体をつなぐ「グローバル」な考え方とも言えるだろう。

教祖はひながたの道の初期において、徹底した施しや母屋の取りこぼちなどを通して、物の「所有」を否定されたように思われる。また、私たちが生きるために必要な物は神からの恵みであり、人間のからだは物の中でもその個人の魂に貸されたいのちの所在であり、からだの機能は魂に与えられた人間の心が使用する道具(陽気暮らしを目的とした)であると教えられた。松井教授の「レンタルの思想」は、一種の理神論を想起させるが、かつてそれが17、18世紀においてヨーロッパの啓蒙主義に強い影響を与えたように、21世紀の人類の欲望を制御できるあたらしい思想として広く受け入れられることを祈りたい。